

氏 名	うえ だ とも ひろ 上 田 朋 宏
学位(専攻分野)	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	論 医 博 第 1712 号
学位授与の日付	平 成 12 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	尿失禁の原因及び治療に関する社会医学的研究

論文調査委員	(主 査) 教 授 福 井 次 矢	教 授 清 野 裕	教 授 小 川 修
--------	----------------------	-----------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

世界一の長寿国となった日本の疾患構造は、高齢化社会への移行から老人退行性疾患に変わってきている。その疾患構造の大きな変化の中で尿失禁は、高齢者の生活の質を損なう病態として重要視されるようになり、尿失禁の原因をつきとめ、病気を根治するといった生物科学的手法だけでは解決できず、人間と環境との関係をよりマクロ的な視点でとらえ、社会心理学的要素を含めて病気をトータルにとらえる社会医学的研究が必要とされる。

そこで我々は、尿失禁医療を社会全体で行う必要性を証明する目的で研究を行った。

研究方法：1) 滋賀県甲賀郡内7町の40—74歳の住民(58182人)から男女各年齢5歳階級の標本が、250名ずつとなるように3500名を多段階化無作為抽出し、郵送法で尿失禁の有無と症状、既往歴、尿失禁に対する問題意識などに関する23項目の調査を行った。次に、2) 入院中にオムツおよび尿道留置カテーテルによって管理されていた315名の尿失禁患者に対して排尿自立を目的とした治療を行い、入院中、退院後の5年間経過観察し、治療の有効性、尿失禁の再発因子を研究した。最後に、3) 尿失禁の大きな危険因子の一つである糖尿病の膀胱機能異常の原因を明らかにする目的で、自律神経異常との関連を膀胱内圧測定と sympathetic skin response (SSR) を用いて検索した。

研究結果：1) 高齢者を中心に尿失禁は高頻度に存在している。2) 高齢者の尿失禁を引き起こす原因は、尿路内と尿路外のものに分けられ、特に、尿路外のものとしては、痴呆、日常生活動作の低下、介護力の低下が大きく関与していた。3) 糖尿病は高齢者の尿失禁の尿路内の危険因子の一つであることが明らかとなった。糖尿病患者においては、自覚症状発現以前から高頻度に膀胱機能障害が存在していること、自律神経の障害が膀胱障害に大きく関与していること、また SSR が、糖尿病性膀胱機能障害の早期診断に役立つことを示した。4) 高齢者の尿失禁の治療における医療サイドの問題として、カテーテルやオムツが尿失禁の管理のために安易に使用されていることがあげられた。我々は、十分な計画と治療環境の整備によって、尿失禁を有する高齢者の殆どが排尿自立できることを示した。また長期のカテーテル留置による尿路管理が尿失禁を長引かせる最大の危険因子であることを明らかにした。6) そして、高齢者の尿失禁をコントロールするためには、長期を展望した治療・管理計画が必要であることが明らかとなった。7) 次に、患者サイドの問題として、尿失禁が単なる老化現象の一つでなく治せる疾患であるという認識が非常に低いことがあげられる。我々の調査では、患者の意識調査の中で、尿漏れを病気と認識している人は25%、治療可能と思っている人は38%に過ぎなかった。また63%は歳のせいと思っており、加えて、羞恥心のために受診をためらっていることなどが認められ、尿失禁に対する誤った認識が明らかとなった。

結論及び意義：(1) 高齢者を中心に高頻度に認められる尿失禁の治療に際しては、尿失禁を引き起こす尿路内及び尿路外の原因の的確なアセスメントと、それに基づいた長期にわたる治療管理計画が必要である。また、(2) 尿失禁は適切な治療によって矯正できるにもかかわらず、医療者側、患者側の双方ともに尿失禁の治療に対する認識の欠如が認められ、尿失禁患者の受診率及び治療効率の向上には、医療側の治療環境の整備とともに尿失禁を有する地域住民に対する啓蒙活動が今後重要である。

論文審査の結果の要旨

高齢化社会の到来とともに、本邦の疾患構造は老人退行性疾患が主流となりつつあり、中でも尿失禁は、高齢者の生活の質を損なう病態として重要視されてきている。本研究では、尿失禁の原因を患者と環境の相互の視点からとらえ、社会医学的要素を含めて解析することによって、その問題点を明らかにする事を目的とした。

まず、尿失禁の潜在的原因として頻度が高いと推定される糖尿病患者に関して、自律神経機能検査を用いた糖尿病性膀胱機能障害の検討を行った。その結果、交感神経皮膚反応試験の消失をみる以前の、早期糖尿病患者においても高頻度に膀胱機能障害が存在している事が示された。次いで、カテーテルやおむつにて管理されている高齢者315例、また特定地域の住民から無作為に抽出した3500名を対象に、尿失禁に関与する因子の検討を行った。その結果、高齢者の尿失禁は積極的な治療介入によって短期的には改善できるものの、長期の維持には治療環境などの因子が大きく関与していることが明らかとなった。また、患者側の問題点として、尿失禁の病態や治療に対する認識が非常に低いことも明らかとなった。以上より、尿失禁の治療には、危険因子の認識とそれに基づいた計画的治療が必要であり、その維持と推進には治療環境の整備と患者への啓蒙が重要であると考えられた。

以上の研究は、尿失禁の原因解明に貢献し、今後の高齢化社会の重要課題である尿失禁治療に寄与するところが多い。

したがって、本論文は博士（医学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成12年3月29日実施の論文内容とそれに関連した研究分野ならびに学識確認のための試問を受け、合格と認められたものである。